

私の戦争体験

第34集 2012親子で学ぶ平和学習資料

おじいさんやおばあさんが体験した大切な大切なお話の数々

もくじ

◎巻頭特集	
憲法を活かそう！地球の恵みを活かそう！ 原発も基地もない世界を	P.2
あの体験を語りつなげなければ	P.6
忘れない、あの日あの時	P.7
6月1日の空襲	P.8
私の戦争体験	P.10
戦時中の児童の生活について	P.12
若い世代に伝えたい	P.13
◎「核兵器禁止条約の 早期実現を求める署名」報告	P.15



あの体験を語りつなげなければ

景山 マサ 84歳

昭和20年6月大阪大空襲で、家も財産もなくし、無一文になった。母と姉と私は着のみのまま、母の郷里の「奈良県宇陀市室生区三本松」にある叔父夫婦の元に向かいました。駅から歩いて1時間、身も心も疲れ、重たい足取りでした。この日は、昨夜の空襲が嘘のように晴れ渡り、あたりには静けさがただよい、山々に囲まれた田園地帯に、ポツリ、ポツリと建った茅葺き屋根が見えてきました。生家の前で小さく見える人影。まだ遠く離れているのに、「あつ」「叔父さんだ」と互いに声を交わしました。でこぼこ道をひたすら歩いて近づくと、叔父さんは、「よう帰ってきた、命助かってよかった」と心から喜んで迎えてくれました。家の中では声を殺して泣く叔母の姿がありました。そこには、22歳ビルマで戦死した英太兄ちゃんのと、その2カ月後に、やはりビルマで戦死した姉婿さんの遺影が並んでました。姉婿さんは、1歳の女の子を残しての戦死です。叔母は最愛の息子を失った悲しみと、無念さで小さくなった肩を震わせていました。その当時、出征兵士の家は誉れの家とたたえられ、戦死は名誉と誇り、涙を見せることは恥とされていたのです。我が子の戦死を人前で笑って耐える親の気持ちは、なぐさめようのない戦争のむなしさでした。ふと、子どもの頃がよみがえってきます。

毎年、夏休みに入ると、都会に住む従兄弟11人がこの家に集合し、英太兄ちゃんが先頭に山へ虫取りに行ったり、川で魚釣りをしたり、泳いだりして夕方遅くまで遊んでいました。夜になると満天の星空のもと、無数に飛び交う螢を追いかけて回し、わいわい、わくわくの私たちでした。遠い記憶に刻まれた情景は、今も忘れることなく、私の中に息づいています。相次ぐ戦争がもたらした悲惨な状況は許されません。昭和から平成に変わって早や24年。戦争を体験した世代も年々数少なくなり、戦後生まれの団塊世代がすでに定年を迎える今日、いろいろな問題を抱えているけれど、平和で恵まれた生活に慣れるにつれ、どうしてあんな無謀な戦争があったのだろうか……年を追う毎に気になり心が揺らぎます。あのような状況がまたとなくするためには、風化していく戦争体験を語り続けていく。戦争をなくす事には繋がらなくても、戦争を考えるきっかけになってくれればと、生き残った者の使命とも思っています。

忘れない、あの日あの時

景山 マサ 84歳

昭和20年6月15日。当時、私たちは生野区新今里に住んでいた。第4回大阪大空襲で無差別攻撃があった。市民に対する情報は、5分ほどしか余裕がなかった。その日の朝は、澄み切った青空が広がって、今日こそは買出しに行かなければと母は、柳行李を出し、大切な絹の着物や大島の着物を出したり入れたり「手放すのは惜しいのだけれど」といった。「今日か明日にでも家が焼ける覚悟はしているのに……」と姉と私はやけに笑った。当時の食糧事情は、1日297g。1食分で茶碗1杯分である。しかも大豆や芋が米の代用とされ、遅配欠配は当たり前前で、人々は大変厳しい状況であった。都会に住む私たちは遠い農家まで、窓から乗り込むほどの満員電車に乗り、やっとの思いでわずかな食料を手に入れ飢えをしのぎました。違法な買出しは警察に見つかれば直ちに没収されるのだ。恐れながら母はリュックを背負い家を出ました。突然「警戒警報」のサイレンが鳴り続いて「空襲警報」の発令。2人は防空壕に入る構えをした矢先に「敵機来襲」のマイクが走る。ザー、ザー空気を切る不気味な音、トタン板を激しく叩くような

大阪大空襲
1945年(昭和20年)の3月から8月にかけて8回にわたっておこなわれた、大阪市を中心とする地域への無差別爆撃の総称。
8回にわたる空襲で、一般市民10000人以上が死亡したと言われている。

出征兵士
軍隊に加わって戦地に行く兵士のこと。

無差別攻撃
軍事施設や軍人と、それ以外の民生施設や民間人と区別せずに攻撃すること。
国際法上、禁止されている。

柳行李
コリヤナギで編んで作られた蓋付きの箱。主に衣類収納や旅行用の荷物入れに使われた道具。

警戒警報・空襲警報
敵航空機の来襲の恐れがある時に発令されるのが「警戒警報」。「警戒警報」よりさらに逼迫した危険がある場合に発せられるのが「空襲警報」。この2段階で警報が発せられる仕組みとなっていた。総称して「防空警報」といつ。

防空壕
空からくる敵の攻撃に対し人員や施設を守るため地を掘ってつくる穴やみぞ。

敵機来襲
敵の航空機が襲ってくること。

爆音。思わず窓越しに見た大編隊と降り注ぐ足元の焼夷弾「逃げよう」。と2人は叫び道路に出た。家並みを埋め尽くす火柱と黒煙に東に向かって無我夢中で走った。どの道も火と煙でふさがれていて戸惑った私は金縛りにあったようだった。「だめだ」と思いきや後ろから「南へ逃げろ」の力強い男の声が出た。恐怖との戦いでどのように逃げたのか記憶になく、とにかく必死であった。見知らぬ男性の一言が私を勇気づけ九死に一生を得ることができた。姉は私を見つめ「無事でよかった」と互いに喜び合った。そこには悲喜こもごもの人たち、力なく「助けて」の声も。水一滴もなく目を覆いたくなるような光景は地獄の惨状であった。倒壊していく家々から飛んでくる火の粉の上やがて大粒の黒い雨が降ってきた。2人は手を握り今里駅に向かって走った。構内では避難してきた人たちがぎっしり詰まっていた。「マサちゃん」と、どこからか母の叫ぶ声が出た。「母ちゃんだ」。顔を合わせた3人は、どっと涙が溢れ落ちました。あの日、あの時477名の命が失われた。「戦争」という愚行を次の世代に伝える必要があるのです。それは「平和を念じる」私の遺言でもあるのです。

6月1日の空襲

蔭山 喜美子 82歳

いつものように7時45分ごろに家を出ました。勤め先の大阪通信局資材部の局に到着したのは大体8時15分くらいです。着くと同時に警戒警報のサイレン。「またや、怖い」と思うと同時に、飛行機の爆音とともにドーン、ドーン焼夷弾が目の前に。それと同時に、空襲警報のサイレン、6月1日大阪のB29、450機の襲来。朝の挨拶どころか、焼夷弾が、次々落とされ、前も後ろも火の海。逃げ回る先々火花が散り、空もだんだん暗くなり黒い雨が降ってきたのです。どうぞ、神様助けてください。死にたくないイエス様。ナムアミダブツ……あらゆる神仏に大きな声で叫びながら、先輩たちの背中を見失わないように必死に逃げ回るが、次々と焼夷弾が落とされ、あちこちで火が上がりリレー式にバケツで水をかけるが、全然消すことはできない。

ふと目の前を走っている同期入局の中谷君の背中に火が付き背中が燃えている。後ろを走っていた私たちは、その中谷君の火のついた背中の衣装を脱がしたら、背中一面の皮膚まではがれてしまい「痛い、痛い、熱い、熱い」と泣き叫ぶ中谷君。私たちは水のあるところを探し、かけられるだけの水をかけながら逃げ回る私たち。

次から次へと途切れることなく落とされる焼夷弾。暗くなっている中でB29が低空で今度は機銃掃射。飛行機の姿も見えない。何時間たっているのかまったく分からない。火の中を逃げ回る足元には焼夷弾で焼かれ両手両足を上に真っ黒焦げになってみんな同じ姿で死んでいるのです。

防空壕の中で死んだ人たちは、蒸し焼きのような状態で顔から体全体が膨れ上がっているのです。逃げ回っているうちにふと手に持っているのは、ただ一冊の本だけです。焼夷弾に落ちないように逃げ回るのが必死でした。

その内に爆音も少なくなり、上のほうから少しずつ明るい空が見えてきたのです。雨も徐々にやみ、長い長い時間の空襲だと思っておりましたが、おそらく4〜5時間だったのだらうか。いまだに私はわかりません。完全に空も明るくなると同時に空襲警報解除のサイレン、私たちは生きていますと泣きました。局の人たちの誰が生き延びられたかわからないまま、みんなそれぞれ帰途に着きました。

町は焼け野原。まだあちらこちらと火の手があがっているところもあり、帰途に着くのに足元に死んだ人たちに触れないように、一歩一歩わが家に向かいました。私の自

焼夷弾
敵の建造物や陣地を焼くことを目的とした砲弾や爆弾。木造の日本家屋を効率よく焼き払うために使用された。



B29
アメリカのボーイング社が第二次世界大戦中の1942年に完成した長距離爆撃機。日本本土の軍事施設を破壊するとともに、都市に対する無差別爆撃を行い、戦局に大きな影響を与えた。広島と長崎に原子爆弾を投下したのも同機である。

機銃掃射
機関銃の銃口を動かし、人をなぎ払うように射撃すること。

宅は港区田中町港新地の港温泉の前にあったのです。両親と姉妹と会えたときは、お互い泣きあいました。港温泉も焼けましたが、浴槽が大きく深く私たちはそこを寢床にして避難してしました。

小学校の出身校。錦尋常小学校も大阪市立運動場もすべてなくなりました。私には小学校時代の友人は生きているのか死んでいるのか、小学校の同窓会は一度もしていないのです。

戦争に負けて40年くらいは、飛行機の音が非常に恐ろしかったです。現在の平和な生活に毎日感謝しながら二度と戦争が起こらないようにと願うばかりです。

私の戦争体験

三浦 一男 83歳

太平洋戦争末期の東京大空襲を経験した1人です。あれは1945年（昭和20年）3月10日の夜の地獄のような光景を60年以上たった今も鮮烈に覚えています。これからも忘れることはできないでしょう。

当時私は、深川古石場に住んでおり裏に東京商船学校がありました。3月9日学校から帰ってくると、いつものように飼っていた伝書鳩を籠から出してやり帰ってくるのを待っていました。いつもなら10分程で戻ってくるのですが、その日はなぜかいつまでも戻ってきませんでした。その時すでに何か異変を感じとっていたのかもしれない。

3月10日午前0時過ぎ、家族の早く逃げろという大声に私は、何が何だかわからないまま、防空頭巾を被り焼夷弾が落ちてくる中を必死に海に向かって逃げていました。まるですさまじい花火が頭上めがけて降ってきた。あたりは、一面火の海でした。道端には、

いくつもの焼死体があり、熱さに耐えきれず防火用水槽や川の中に飛び込む人でひしめき合い重なり合って、飛び込むスキ間もない状態でした。一緒に逃げた近所の同級生も熱さに耐えられなかったのか、防火用水槽に飛び込んでしまいました。一瞬の出来事で止めることができませんでした。焼夷弾がドンドン降ってくる中では、どうすることもできなかつたのです。

途中何かが足に触れたので見ると、お婆さんが私の足を掴んでいました。しばらく一緒に逃げましたが、いつの間にか、はなればなれになっていました。中には若い母親が、赤ちやんを自分のおなかの下へ隠すような状態で真っ黒に焼け焦げていましたが、赤ちやんは、そのままの状態で亡くなっていました。こんな無残な光景は今も脳裏からはなれません。

一夜が明け、家に帰ろうにも焼け野原のため方角がわからず、来た道を歩いてると東京商船学校が見え、やっとたどりついた時、父親がトビで死体を一つずつかきわけて探している、私を見るなり両親が涙を流しながら、皆で抱きあって泣きぐずれました。でも同級生を思うと、いつも心が痛みます。今思えば消防団員だった父親が、関東大震災を経験しており「焼夷弾が落ちてきても絶対に川や用水槽には入ってはダメだ」と聞かされていたので助かったのかもしれない。東京商船学校は、まぬがれたものの、そこに逃げた人の中にも火傷で顔や目、体など、痛々しいかぎりでした。一夜にして10万人もの人たちが亡くなられた、こんな悲惨な戦争は二度としてはなりません。絶対に。

戦争体験は、知っている者が次の世代へと語り継がねばならないと思います。

太平洋戦争

1941年12月8日から45年9月2日にかけて日本と連合国（主にアメリカ、イギリス、オランダなど）とのあいだで戦われた戦争。第二次世界大戦の局面の一つで、太平洋から東南アジアまでを舞台に戦闘が行われた。当時の日本政府は大東亜戦争と呼称していたが、敗戦後連合国に使用を禁じられた。

東京大空襲

昭和20年（1945）3月10日未明、米軍のB29爆撃機約300機による東京への大規模な空襲。死者約10万人、焼失家屋は27万戸に達し、下町一帯は焦土と化した。

伝書鳩

鳩の帰巣本能を利用して遠隔地から鳩にメッセージを持たせて届けさせる通信手段の一種。あるいはその媒介として使われる鳩。

防空頭巾

太平洋戦争末期の日本で使われた、空襲の際に落下物から首筋や顔を守る頭巾。頭髪を押さえ込み、頭髪が燃えるのを防ぐ役割も果たす。

戦時中の児童の生活について

加藤 貞子 81歳

テレビで放映していた「おひさま」の中で、電車の運転手さんが女性？

若い人や、地方で戦時中を過ごしておられた年配の人にも不思議に見られた事でしょう。

「欲しがりません。勝つ迄は」

「うちで止まん」

を合言葉に国家が邁進していました。

当時、昭和12年、支那事変勃発の年に小学1年生だった私は、戦争と共に大きくなりました。

配給制度の中で主食が成人者に二合三勺という中で代替食の名のもとに、さつまいもや干しうどん、とうもろこし粉が支給され、実質的には一合にもならない状態だった様に思います。

衣類ももちろん配給なので、お米の生成色の木綿袋をお米屋さん頼んで入手し、体操服に更生し着ておりました(母の手製)。父が、郵便局に勤めており背が低かったのに大寸を支給され裾の長い分をカットし、その布で弟の半ズボンも出来た様でした。その裁断のはぎれを私は運動靴の破れているところに当て布として、かがってはいっていました。

高学年になった時、担任が「あとで職員室に」を言われ立ち去りましたが、当時子ども心に戦争反対を呼んで不良やと言われていた私は、きつと大目玉にあうのを覚悟で職員室に行きました。「これで明日の試験にはいって行き」を運動靴の切符を手渡されましたが「先生、切符あっても、お金がいるから…いりません」と断りました。

持物(下駄等)にインシヤルを書いたりした時に「非国民やで大人やったら、ブタ箱(刑務所)入りや！」と前日も叱られていたので、この様に配慮していただいた事を凄く感謝しましたが、変な顔しておられた担任に「どうせ走る時は、はだしやし、このズックはいてし、格好悪いんやったら私、別に走らんでもええから補欠の人に出してもらって…」と答えましたが、翌日の試合には走っていません。

両親と一緒に暮らしていて、「私の家族」という作文を書いたり明るい楽しい毎日でしたが、少しして、当時4年生の妹は、学童疎開で石川県の浄願寺に行きました。大豆をいって、お手玉の中に入れて人形と一緒に小包を送りましたが、何もおやつのない時の唯一のおやつだったそうです。

その妹も環状線と貨物線の間で挟まれた土地に建てた自宅が、強制疎開地域になったので叔母が石川県まで迎えに行き帰阪しました。髪の毛や体にしらみをいっばいつけてです。手続きをして弟、妹たちと母は、山口県の父の実家に行くことになりました。

若い世代に伝えたい

松内 千代子 88歳

御免下さい。

今年88歳になる私は、19歳の春から2年間あまり中国大陸で看護婦として勤務しました。多くの傷病兵のお世話をし、そして大勢の兵を看取りました。戦にまきこまれ一緒に勤務した同僚も亡くしました。この辛い体験を亡き人たちに代わって若い世代に伝えたく筆をとりました。

拙い歌ですが、よろしくお願ひ申し上げます。

視力衰え誤字雑字はお赦しく下さい。

支那事変
1937年(昭和12年)から始まった日本と中華民国の間で行われた長期間かつ大規模な戦闘である(ただし、両国とも宣戦布告を行わなかったため事変と称する)。
「支那事変」という呼称は、当時の日本政府が定めた公称であるが、現在は日中戦争と呼ばれる。

配給制度
戦争の泥沼化にともない、戦争遂行のため軍需品を中心とする生産力拡充を強行した結果、日常生活必需品や米など食料が極度に不足してきたためにとられた制度。

二合三勺
米をはかるときの「合」の下の単位。2.3合のこと。

学童疎開
昭和18年(1943)末ごろから、第二次大戦の戦局の悪化に伴い、戦禍を避けるために大都市の学童を地方都市や農村に集団的また個人的に移住させたこと。



2011年11月から取り組んだ「核兵器禁止条約の早期実現を求める署名」報告

「核兵器禁止条約の早期実現を求める署名」をNPT再検討会議議長に提出しました。



今回、2012年4月21日（土）ヒロシマ平和の旅（日帰り）にて、広島平和文化センター理事長ステイブン・リーパー氏と常務理事湯浅氏に直接手渡しました。

- 日時 4月21日（土）11：30～12：00
- 場所 (財)広島平和文化センター会議室にて
- 署名総数 23,831筆（当日参加者22筆含む）



昨年11月より、エリア委員会・コープ委員会を中心に、署名の取り組みをすすめてきました。

南海堺東駅前やJR鳳駅前、コープ浅香店前での署名活動に取り組みました。今年1月には、共同購入・個人別配送にて、署名用紙を配布し、組合員様の『核兵器をなくそう』の思いが集められました。

ご協力をいただいた皆さま、本当にありがとうございました。

みんなの声を届けることができました！そして、みんなの声は世界へ！！



「核兵器禁止条約の早期実現」の交渉を求めて署名を提出

「核兵器禁止条約の早期実現を求める署名」は、全国から平和市長会議に寄せられた47万筆を超える署名とともに、5月4日ウィーンで開催されたNPT再検討会議第1回準備委員会の議長に、平和市長会議会長の松井広島市長が手渡しました。

十九春 征つて来ますと 別れ告げ 吾れ看護婦は 戦陣へ発つ
 ひと筆に 念をこらす 従軍記 亡き人々の 声の代筆
 月光の 射しこむ部屋で 只一人 看取りし兵は ふる里の友
 見廻れば つい先程まで 泣きしかと 枕辺にその 母の便り
 眠りつつ 涙溜めゆる 病兵は 祖国の母の 夢に泣きしか
 母思ふ 心は吾れも 亦同じ 祖国にむきて 幾たび泣きしか
 ゆきずりの 吾れ看護婦に 身の上を さらけて逝きし 兵を忘れず
 金剛石の歌 座右に 身を正し 思い半ばに 逝きし老兵
 ソ連軍に 追われついに 命絶ちし 白衣の友の 無念に泣かゆ
 浅からぬ 縁と思ふ 傷兵の 内地転送 星降る朝
 そこはかの 慕情残して 別れ来し 今に引摺る 戦場の青春
 残り香は 遺品にみちて なつかしき 主なき品 照す月明かり
 戦争の 修羅場幾度も こえ来て 尊き平和に 永らふ至福

